インタビュー

株式会社UCHIDA　取締役・センター長　新事業推進室室長　落合（おちあい） 隼平（じゅんぺい） 氏

「カーボンの魅力をもっと身近にしたい」と話す落合取締役

株式会社ＵＣＨＩＤＡ

所 在 地　入間郡三芳町上富2048-1
代 表 者　代表取締役社長 内田 敏一 氏
事業内容　複合材料成形加工
資 本 金　5,000万円　　従業員数　40名
Ｔ Ｅ Ｌ　049-274-3030
https://uchida-k.co.jp

「複合材料の成形加工技術で世界に貢献する」同社の落合取締役に話を伺いました。

■貴社の概要について、教えてください。

落合　1968年、現社長のお父様がマネキンづくりで創業しました。マネキンはガラス繊維とポリエステル樹脂を混ぜたＦＲＰのものづくりからスタートしました。1980年代は自動車のエアロパーツを量産。その後、2000年代はカーボンファイバーにシフトし、より軽量で、高強度、高剛性、高品質を目指して、オートクレーブ設備を導入しました。二輪や四輪、航空機産業に参入するため、航空宇宙部門のＪＩＳ Ｑ ９１００／ＪＩＳ Ｑ ９００１を認証取得して、航空宇宙、防衛関係を増やしてきました。炭素繊維に樹脂を混ぜた炭素繊維強化プラスチック（ＣＦＲＰ）成形で、世界のさまざまな分野で製品の軽量化に貢献しています。ＣＦＲＰは、金属よりもはるかに「軽くて、強く、なおかつ錆（さ）びない」のが特徴です。バイクのレース部品や航空宇宙、防衛、自動車などに使われています。

■落合さんの経歴について

落合　父親の建築工事の手伝いをしていました。もともと車のエアロパーツが好きで、当社の求人に応募し、2002年に入社しました。入社当初からエアロパーツをカーボン成形加工する部署に配属となりました。常に新しいことを進めていく、チャレンジしていく社長が頼もしく、現在入社23年目です。2018年に取締役に就任し、2020年にこれまでの技術開発室を「新事業推進室」に改め、主に商品開発をしています。

■自社商品の「BAKUSOLE（バクソール）」について

落合　2020年のコロナ禍、子どもも自宅に居るしかない自粛生活でした。当社はこれまで、バイクやＦ１、航空機などのハイエンド製品をつくってきました。もっと人の身近に役立つものづくりができないかと思い、子どもを見ていました。子どもたちを外で走り出してあげたいな。うちの子は足が遅いので、速くしてあげたいなと思い、大人用のカーボンインソールはありましたが、子ども用がないので、着手しました。

カーボンの魅力をもっと身近に

BAKUSOLE

（左）成形型、CFRP製品

3Dプリンターによる成形型製作

埼玉県立大学との共同開発で、子どもの成長を阻害しない、カーボンインソールを開発しました。筋力の使用量が少なくなるので疲労を軽減し、走行効率を高める効果があることがデータで示されています。21センチから28.5センチのサイズ設定で、大人でも使用できます。

埼玉県産業技術総合センターのデザイナー支援事業のフォローアップ支援を利用して、商品のブランディングやパッケージングを行い、商品化しました。テストマーケティングとして、商品購入型のクラウドファンディングを行い、一般販売しました。現在はネットショップで購入できます。

■今後の展開・抱負は

落合　製品を成形するための型は、３Ｄプリンターでつくっています。商品を増やすよりも、現場の課題と時代要請を掛け合わせて、新事業をつくろうとしています。現場の型に関する課題や困り事が多いので、「３Ｄプリンターで型をつくってオートクレーブ成形で使える型」を国内で初めて開発しました。型を商品化すると、同業他社の会社がお客様になり得ますので、これをＰＲしていきたい。安く、納期も短く、メリットだらけです。

社長は「チャレンジしたことがないことにチャレンジして、会社に新しい価値をつけたい」という思いです。新しい技術で課題を解決できたら時代にも合うし、企業価値も上がります。「みんなで企画する」という組織風土になっています。「社長が決めたことについてこい」という時代では、もうありません。みんなで考える時代です。

2030年に向けて「私たち個性豊かな仲間と、複合材料の技術革新を起こし、陸・海・空、そして宇宙へ、世界に感動の輪を広げる」が当社のパーパス（存在意義）です。実現するために、新事業推進室は技術革新のコアを担い、グローバル展開を踏まえた技術開発をしていきます。人の作業をロボット化、機械化していきます。サステナブル経営とサーキュラーエコノミー、カーボンニュートラルを実現して、働きやすい会社をつくることが一番のテーマです。そして、みんなでワクワクしながらものづくりしていこうというのが社長の思いです。「とにかく、楽しめっ！」です。